# 「地域医療」

医学博士
渡辺医院　院長　渡　辺　大　介　氏

皆に看取られて死んでいくことがよいとされるが、孤独死を希望する人もいる。

慢性心不全で肺に水が溜まっている患者さん。入院を勧めたが、在宅治療を望まれた。週一回の訪問診療。自家用車で買い物をし、自炊していたが、運転も難しくなったので車を売却し、宅配の弁当利用となった。単身独居の為、買い物など身の回りの世話が必要となり介護保険を申請し、庭の草取りもシルバー人材センターを利用。正月に子供たちが帰省した折、病状を説明した。

ある時、室内で転倒して左腕に怪我。毎日の付け替えが必要となり入浴も不安だったため訪問看護を導入した。しかし、問題はお金の管理。本人が銀行の窓口に行かねばならない。在宅酸素利用中のため、携帯酸素ボンベを利用しようかとも考えたが、ご本人が酸素カプセル利用を提案。試してみると何とか自分で処理できた。

在宅医療開始後1年半、心不全で突然なくなった。宅配弁当の配達で異変を気づかれ往診依頼。死亡を確認し、訪問看護ステーションに死後の処置を依頼。家族が来られるまで留守番をヘルパーさんにお願いした。

葬儀の後、息子さんが挨拶に来られた。「お世話になりました。おかげで父の思うような最期を迎えることができました。」ととても感謝された。

毎晩その日の出来事を家族に連絡し、ヘルパーさんや訪問看護に感謝されていたと言う。

少子高齢化し、独居の老人が多い。家族に看取られながら死を迎える事が幸せだとは限らない。ひっそりと死にたいと思う人もいる。死に方は自分で決めたい。